

座談会

サルトロ、カンリ遠征をめぐって

出席者	梅棹 忠夫	桑原 武夫	今西 錦司	齊藤 惇生
	加藤 泰安	中尾 佐助	岩坪 五郎	谷 泰
	高村 泰雄	北村 泰一	林 一彦	平井 一正
	上尾庄一郎	山口 克	多田 政忠	高野 昭吾 他

梅棹 チョゴリザの先例にならって、隊員、AACK 会員の有志、それに若い京大山岳部の部員の方にも集まっていたが、サルトロ・カンリ遠征をふりかえって反省討論会を開きます。

桑原 報告者は問題提起を簡潔に、討論に時間をかけられるように進めてください。

今西 各項目にわたることも結構ですが、とくにチョコリザやノジャックとの比較を考慮して、発言するようにしていただきたい。

過去の経験の集大成

梅棹 それでは齊藤君、問題提起をお願いします。

齊藤 1955年からAACKはカラコラム、ヒンズークシと、日本の山岳界で独占的に手がけてまいり、53年のチョコリザ、60年のノジャック、そして今度のサルトロ・カンリと三つの山の初登攀に成功しました。今回のサルトロの成功はこれまでのAACKの経験の集積の上に立たねばできなかったことで、また現在までの経験の総括という意味も持っていると思います。私は今度始めて遠征に参加したのですが、なにか全体的に余裕綽々という感じで、遠征にともすればともないがちなイチかバチかという場面や、精神的にキナキナするという感じが少なかったと思います。この点は全部の隊員に同感していただけたらと思う。

しかし実現するまでにはひじょうな苦労があったことは、ご承知の通りです。カラコラム・クラブとの合同という形で許可が得られたが、長大なアプローチが困難視され、ピラフォンダ・ラすら越せないのではないかという声もあった。とりつき地点の氷の状態が悪いので、アタックはむづかしいだろうという、ジョン・ハントからのセッションもあって、隊員一同じゅうぶんの覚悟をしておたのです。途中クローのストライキもなく、峠越えもわりにスムーズにゆき、かえって隊員の高度順応に有利であ

ったと思われる。けれども、直接サルトロとあいまえたときには、かえって悲観的な見方があった。にもかかわらず、ルートワークも深い雪のラッセルに苦しめられながらスピーディに進み、ついにパキスタン側の隊員バンシル君も加えて登頂に成功したのであります。

遠征をふりかえって討論を進めるのに、次の二点、すなわち、ピラフォンダ・ラを越えての輸送をいかに克服したか、もう一つは、ひじょうに困難視されたサルトロの山そのものの攻撃をいかにしたか、が中心になるだろう。この二つにつけ加えて、食糧・装備の進歩、隊員の編成と健康状態、それに心残りであった他地域の偵察ができなかったことなども、論じたらどうでしょうか。

梅棹 だいたい今度は余裕綽々であったというのは何によるものですか。山がやさしかったのか

加藤 まずお金の余裕があった。それからクローがチョコリザよりひじょうによかった。リエゾン・オフィサーが有能だった。現地へ着いた時期が早かった。こうなると小細工をやるより陣太鼓を鳴らして堂々と進むという方法をとった。トラヴェルの間はそうだった。

梅棹 トラヴェルの余裕が結局山にはいつてからの余裕を生んだと考えていいですね。

中尾 ぼくは余裕綽々だというのはもっともだと思う。それは隊員の選択がよかった。ぼくは今年OBと現役学生の混合編成隊でスプチュエに行ったのですが、サルトロの隊員がずらっと並んでいるときの顔を見て、これだったら楽だろうなとつくづく思った。

加藤 それは隊員の中に何回も行っているものが何人かいる。それから準備期間がひじょうに長かった間によく集って話をし、お互いの連携がよくとれている。それにポーッとぼけたのがいて、トラヴェルの長いときにはひじょうにいいね。(笑)ベスト・メンバーだろうね。これは

若手のこと。年寄り連中は違いますよ。

梅棹 隊員の構成の問題になりましたが。

岩坪 チョゴリザに比べますと、みんなだいぶん兵隊の位の高いやつばかりが来たような感じがします。前には上の二三人は働くけれども、あとはぼやっと見ているだけ、あるいはついて行くだけというのが多かったが、今度はちがう。ぼくより若い土屋や前小屋などが、チョコリザのときのぼくよりもはるかにしっかりしていた。全体が若手将校みたいで。

谷 しかしみな佐官級とか青年将校ばかりだというのは、ひじょうにいいけど、逆に歩が足りぬということ、つまり一兵卒がないという不便はあると思うのです。

梅棹 ポーターがよかったというが、それを歩と考えることはできませんか。

谷 それはできますが。ただみんな同じ程度に能力があるものばかりだと、だれかがやってくれと思ってほっておいたら、みんなやっていたということが起きたりします。

加藤 これは人ではないが、無電機が今度はひじょうによく働いた。隊が進むのにあんな便利なものはない。わしは機械はきらいですが。

高村 隊員の側からは、だれでもなんでもやれるようになってきたのでよかったという自己評価をやっているけど、留守番役の方からの意見はどうだったのでしょうか。

北村 ぼく個人の見方ですが、隊員のレベルが高かったのははじめから認めていた。それだけに案外と遠征の悪ずれをしていて気づかぬところで大きなミスがありはせぬかと心配していた。幸い大成功をおさめて帰ってきたので、さすがにやはりわれわれの仲間であった、という評価です。

梅棹 遠征にはじめてという人は、齊藤、谷、上尾、前小屋の4人、二へん目、三へん目が多いわけですね。これはたいへん大きいことやな。

団子の串ざしといわれて

加藤 たいへんほめられたが、これは結局若手が働いたので、隊の構成からいえば、隊長・副隊長という団子の串ざしが上に乗っかるというのは、これは=スイ話だな。

梅棹 そのトップ・ヘビーであるという批判は、隊員が決まったときからすでに出ていた。そこにはやはりいい点もあるし、悪い点もある。

加藤 いい点ないですな。なんにもすることがな

いのだもの。実際やっている人に対しては、迷惑しごくな話だったろう。AACKの変な宿命かもしれないけれど、おかしな話だ。

高村 加藤さんの立場としてそうおっしゃいますし、あまり多すぎるトップ・ヘビーはどうかと思いますけれども、ちょうどヨットの下のおもりみたいなもので、あのおもりがなかったら、ぼくらキリキリ舞いしてしまっただけかもしれない。

梅棹 きょうは四手井隊長が来ておられないのでいちばんトップの意見を聞くことができないけれども。

林 私は団子の串ざしの三番目だったのでこれはさっきいわれたように、たいへん迷惑ですね。しかしアンカー的な反面、ひじょうにぼくは楽をした。いざとなったらおっさんが悪いのだという。それは確かにあると思う。やはり大事なことじゃないかと思う。一概に団子の串ざしだからだめだという結論は、まだ早いんじゃないか。

それから、AACKの中ではベスト・メンバーであるけれども、まだ隊に参加しなかった優秀な人はかなりいる。木曜会の連中が主体になったが、地方にいる人はたくさんいる。そういう人がなるべく参加できる体制をつくっていただきたい。

梅棹 トップ・ヘビーのよしあしの問題と別に、年輩者が何人か入ることにより若い優秀な人が出られなくなるという批判ははじめにあった。

林 それについては、準隊員というような枠をつくって、それを強引に押しあげた。いろいろ迷惑した人もあったと思いますね。

平井 トップ・ヘビーの問題もケース・バイ・ケースで、今度のようなスケールの大きな山登りになると、年輩者が行った方がいいんじゃないかと思ったのです。合同遠征になるといろいろ問題が起きてくる。われわれだけで解決できないこともある。

梅棹 トップ・ヘビーに対する批判的意見はトップの方からしか出ないですな。

谷 これからの隊は小パーティになるから、今度はひじょうにロスをしという気持がします。

梅棹 まあそういうわけだな。上の方の構成から見たら、二パーティ分はじゅうぶんにある。

一目散に引き揚げてきたが

中尾 ちょっと聞きたいのですが、登頂が終わったあと、みんなサラサラと尻に帆をかけて飛行機で帰ってきちゃったけれども、精神的に疲労しておつたということですか。それとも……。

梅棹 この問題はそうとうに広くおこなわれている批判なんですが、どうぞ、それぞれの立場から発言してください。

谷 金がない、あるいは精神的疲労、それは両方あったのです。その上で帰ってきたというわけです。ぼくはトップ・マネジメントの人にいたいのですが、すぐひっぱって帰るか、それとも残していてもいいとするのかの決定は、結局上層部でおこなわれなかった。帰るとすれば期日はどんどん迫ってくる。だから飛行機の切符も買ってしまったということではなかったかと思うのです。

梅棹 隊員の中では、残って各地を見たいという希望はあったのですね。

谷 ありました。

梅棹 あったけれども、それが実現しなかった。ぼくはかなりあっちこちで聞くのだけれどもね。何たることぞ、AACKにしてああいう引き揚げ方を。腑甲斐ないという。

加藤 全員飛行機で帰すというのは四手井隊長の強い決心だった。今までみたいに長くかかって帰ってくるのは、大学の教室その他に迷惑をかけるし、将来出すのに工合が悪いから。もちろん、山は全部パキスタン側にジャット・アウトされたから行ってはいけない。ほかは行ってもよいということなんだ。それについての希望はあった。しかしみんな物見遊山にすぎない希望しかおれは聞いていない。谷は別だった。

もう一つは、カラコラムはもうええところですよ。もう次のことを早く考えなければいけない。それでは一目散に帰るべし。かなり新婚組もあったかもしれないけれども、(笑)だらしがないが、実際はそういうことですよ。

今西 物見遊山かもしれないけれども、希望者はどういうところだった、場所は。

加藤 フンザ、アフガニスタン、それからダージリン。東パキスタンもあったな。

上尾 ぼくは意見があったのですけれども。酒井さんから手紙がきたときから、できれば、インドラサンの方にまわしてほしいという。

加藤 どうしても行こうという、強い要望はないと思った。

北村 個々に聞いたら、そういう若手の希望はいっぱいあったと思うのです。遠征がスポーツ化事務化して、事後のあとかたづけのスムーズ化ということ、論功行賞的な考え、いろいろある年寄り連中は問題ないが、中層以下が、遠征の悪ずれがあると思うのです。飛行機だったら十数万円、船でも十万円くら

いという、金だけが頭にあるのですね。われわれとしては、金はいいから、あっちこちつかめるだけのものをつかんで帰ってこいという気持ちです。

梅棹 そこはたいへん重大だと思う。飛行機で帰ることはもっともかまわない。ただ、ほかを見てこなかったということに対する留守部隊としての失望感みたいなものが、ひじょうに強くある。

インドラサン 今西 まあ弟分がインドラサンへ行っているのだから、成功したサル

トロ隊からだれか激励に——いっしょに登攀してこいというのではないですよ——情報をもたらし、激励に行くくらいは気持ちがほしいところやな。

林 酒井から来た手紙、それが極端に言えば、お前らはちょっと手伝ってもらいたくないけれども、高度計を持ってきてくれという要請なんですわ。いま今西さんがいわれたような気持ちを全然起こさせぬ。

今西 カラコラムの帰りにインドのパンジャブにまわるくらいなんでもない。

中尾 いろいろいきさつはあるけれども、全体としてみると、だれもどこへも寄らずに帰ったということは、今度のエクスペディションの黒星だとぼくは思うな。

高村 自己弁護になりますが、いちばん強硬だった谷さんが諦めたのは、せいぜい一週間か二週間くらいの時間をもらえても、自分としては仕事になにもできない。それだったらぼくはまた来ますわという結論を出した。

インドラサンのことですが、行くことはやさしいと思いましたが、上尾がひじょうに行きたがっていたし、ぼくは行ってほしいと思った。しかし、インドラサンには一つのパーティがあるわけです。その際、酒井さんのパーティに上尾がはいると、ディスターブするのじゃないかと思った。

梅棹 手紙の文面をぼくは見えていないが、なにを小癪なことをぬかしやがってと、ニヤリと笑って行く手もあるわけや。ところが、このインドラサンの隊とサルトロの隊との間に、ぼくはそういう同じ仲間うちという気持ちがちょっと欠けていたような気がするな。

林 小さいエクスペディションを出しますね。そのコミュニケーションが悪いわけですよ。

梅棹 もしそういうことがあれば、よけいに絶好のチャンスなんです。なにがぼくは、聡明

な考慮がほしかったという印象はありますな。

加藤 ほんとうにそのとおりだよ。これは黒星といわれても認めざるを得ぬ。しかし、おれ自身は明らかにくたびれているのだ。早く帰りたい若手のどうしても行きたいという気持ちがぼくのところへ伝わらなかったな。

梅棹 精神的疲労ということやな。

加藤 もうひとつ、さっきいった悪ずれだな。

斎藤 医者立場からいいますと、みな疲れてないといっても、かなり精神的疲労があったのじゃないかと思えます。

よそへまわることを遠慮したのはやはり金の問題です。物見遊山だといわれたらうしろめたいですね。だから強硬にいいにくい。

梅棹 それはあるでしょう。物見遊山論をやったゆけば、インドを旅行する、あるいは谷のようにアフガニスタンへ旅行するというのも、それが山に対する果敢な斗争でないかぎり、全部物見遊山だという、アルビニスティック・リゴリズムだね。それに対する批判もまたあってよい

今西 学術調査をもうたっているのだから、知らない土地へとにかく行ってきたら、得るところは必ず大きい。物見遊山ということは悪いけれど、見学ということにしたら。(笑)

加藤 おれがいちばん精神的にも肉体的にもへばっていたのだからね。これはおれの責任だ。結局あまり強い抵抗がなかったことはなかったね

今西 やはりみな育ちがいいので、あまり氣勢をあげる若いものがおらぬということか。(笑)

梅棹 ぼくはケツまくりの態度もどこかで必要ではないかという気はするな。

上尾 もうひとついいますと、ぼく自身は準備の段階から事後の処理まで、できるだけ直接隊に参加した人間がやるべきだと考えています。それで写真の関係もあって、あまりほったらかしてよそへまわるということを強硬に言えなかった。

梅棹 いままでになかった空気で、ちょっと面白い問題が出ましたね。

ところで、峠越えおよび山の攻撃のタクティクスについて、もう少し論じていただきましょうか。

ピラフォンド・今西 今度のよう

ラを越えるにベース・キャンプからアドヴァンス・ベース・キャンプがひじょうに遠いというのは、オーソドックスなポーラ・メソッドにはない。たいへん面白いと思うのだけれども

加藤 だいたいスケジュールどおりにいったと思

いますね。一つキャンプはふえたけれど。

今西 マナスのナイケ・コルにあたるのは？

加藤 C3です。アドヴァンス・ベースがC2にあたる。

高村 峠越えの時期については、前からいろいろデータを集め、ディスカッションがあったのですが、今度の場合、ひじょうにより時期をあてたという気がします。

加藤 できればもう少し遅かった方がよかったかもしれない。まあまああんなものでしょうな。

梅棹 去年高村がかなり偵察しているでしょう。

高村 峠の偵察そのものはちがうルートなので、あまり参考にならなかった。ガガル周辺の状況をあらかじめぼくが見ておいたことで、少しは気が楽だったです。

岩坪 高村がパキスタンにひじょうに慣れてきてまして、チョゴリザの今川さんの役割を果たした。ですから、ぼくたちはかえってサボって、悪かったかもわかりません。

梅棹 しかしよかったな。高村君がたいへん役に立った。殊勲甲である。これはまちがいないでしょう。

加藤 それはまちがいない。

高村 今度のはじめて行った人でも、ひじょうに意欲的にウルドゥ語を学びとろうとしていた。それがクーリーを使って峠越えのトランスポートをするのに実に役立った。これは当然そうあるべきことなのですが、やはり少しはいばってもいいことじゃないかと思えます。峠の上のキャンプの谷さんや、その下のキャンプで頑張っていた斎藤さん。物資の送り出しがひじょうに複雑なわけで、それを、ことあればストライキをやるかと手ぐすねひいている人間を相手にやるのですから。この動脈ががちりできたことが、大きな要因じゃないかと思う。

谷 高村は人をおだてるのがひじょうにうまいので。それより重大な三つの要素があったと考えています。リエゾン・オフィサーが優秀だったこと。クーリーがよかった。それから輸送、

トラヴェルに関して高村が大活躍した。

岩坪 隊員が輸送を上手にやったということではぼくの経験では今度がいちばんだった。ウルドゥ語に関しては、上三人を除きますと、(笑)

高村 もう一つ、クーリーの中からサーダー役が一つとまるものが出てきたこと、おかげでずいぶん楽だったように思います。

斎藤 行く前に平井からおどかされていて、クーリーたちに食糧を配給したりするのに、キ

リキリ舞いすると思っていたのですが、はじめだけこちらでやって教えると、あとはみなサーダーがやってくれる。クーリーの扱いがたいへんうまい。たいへん知恵のまわる奴だったですね。

加藤 アスコレみたいな悪漢はあまりいなかった。リエゾン・オフィサーが、なんでもいうことを聞くポケッとしたクーリーばかりセレクトした。また、ポーターがたいへん成長したね。

梅棹 シェルバくらいいきますか。

加藤 まあいきませんね。いったいシェルバはサニヴァントだね。

中尾 シェルバは、おしらはクーリーなんかと違うのだぞという気持をこのごろもってきて、使いに慣れてきたね。

加藤 シェルバは山に登りたがる。むこうのハイ・ポーターは、これから先は旦那のことで、ご勘弁を、というようなことです。

林 チョゴリザのポーターを半分やとった。連中は親近感があるから、それを媒介として、ほかのハイ・ポーターともうまくいったのじゃないかと思えます。

高村 村で出合うちょっと賢そうな子供に、お前は将来何になりたいという、ハイ・ポーターになりたい(笑)という。村へ帰るときにお仕着せの服を着ていきますが、一種凱旋將軍みたいな顔をして帰っていきます。

加藤 林の提案でお稚児さんみたいなのを三人やとったのです。いいやつと悪いやつとあったけれどね。おれについてきたやつは、いきなり I shall go with you. という。びっくり仰天した。これは英語できるとしたら、それしか知らない。(笑)

山にかかったら ラッシュ戦法

梅棹 峠越えの問題はそれくらいにして、アタックにかかってからの問題にはいりましょう。

平井 C3以上のルート工作は、ほとんど林、斉藤、谷、上尾だけでやり、高村、岩坪、平井はサミッター候補として温存されていたのです。高度順応がおくれるし、ルート工作もやりたいのに下でポックとしているのは、あまりよくないと思うのですが。

加藤 それは、雪崩の危険の大きいところだから一層だけ小人数しかあげない。形としては温存になったが。ほかの連中の強さがまだわからなかったから。君たち3人は7,000mの経験があるから、第1回が失敗したら交替であがってもらっていい。

中尾 C3が19日で登頂が24日ですね。かなり早いということです。一種のラッシュをやったのだらうと思うのだけれども。

加藤 一種じゃない。完全なラッシュです。

中尾 とにかく、雪崩の危険のあるルートをどうしても選ばなければならぬということになったら、そこにおる人数と日数を減らすことが、結局最大のタクティックスだと思う。ポーラ・メソッドで一つづつ足場をかためていくのも、こうしたところでは、半面、危険をひじょうに大きくする。そのかね合いのよいサンプルを提供したなと思っています。

林 C4にキャンプを張りまして、頂上までの距離がひじょうに長すぎる。あらかじめC2から見ておって、実はキャンプを一つふやさねばならぬかと思ったのです。それを加藤さんに提案したのですが、なるべくキャンプの数をふやさない方式をとりとうということになった。またC5から上のエスティメーションも、はじめは一日で帰ってこられる予定をたてて、ビバークになってしまった。

今西 一日で帰れるか、ビバークになるかということ、どのくらいにかけておったか。

林 半々くらいに思っておりました。

加藤 ぼくはビバーク必至だと思った。

今西 ビバーク必至で、テントを張らずにラッシュで通したというところは、作戦として今度の中でいちばんみごとなどころだと思うのやけれどもね。

中尾 ぼくもまったく同意見です。

加藤 欲を立てると、多すぎてかなわぬ。

今西 天気周期性を察して、確実な天気をつかんで、しかもビバークで行ったということは、実にすばらしい作戦だね。

中尾 これはオーソドックスなやり方ではないという批評をする人がきつと出てくると思うが、これがこれからのやり方のいちばんよい例だと思う。

林 キャンプ・シックスをつくるにもテントがなかったのです、ほんとうは。(笑)

加藤 盗まれておったのだ。(笑)

高村 第五キャンプ付近がハントの最後のキャンプなのですが、彼の分析では、もう一つのテントを上立てることができれば成功するだろうといっている。ハントの経験による助言を無視して行ったという見方もあると思うのですが、ぼくたちは逆の意味で、軽い気持でやろうじゃないかということになったのです。

斉藤 そうです。食糧もビバークのためでなく、

ふだん山をアタックする場合に必ず持つスベアという気持で準備したと思います。

ビバークを成 功と考えるか

高村 具体的な準備は最低限で、見ようによってはちょっと危なかったかとも、あとになって反省しています。

今西 斉藤が何時になったらビバークせよという命令は受けていなかったらと思うのですが、まだ目の高いうちにビバークを決意して、暖いうちに寝たということは、わがAACKならではのきぬ芸当のような気がして、たいへんうれしかった。

梅棹 ひじょうにみごとで。

加藤 ひじょうにいい決心ですよ、あの時間に決心したということは。

中尾 しかし、それにはやはりノジャックの経験がものをいっているでしょうな。

高村 そうですね、やはりわれわれの仲間がやっているという。それにぼくが少々バテ気味で、スロー・テンポになっていたことが、斉藤ドクターの判断の一つのファクターになったかとも思うのです。

林 加藤さんは100パーセントビバークだとおっしゃったかもしれませんが、その意向がわれわれにじゅうぶん伝わらなかったのかもしれないけれど、ちょっと危なかったという高村の批判はある程度あたると思う。ぼくらは斉藤、高村をじゅうぶん信用していたことは事実ですけども、こまかい点についてまでの考慮がなかったことも事実じゃないかと思うのです。

また、C3とC4をしっかりと固めていたから、第一登攀隊の成功の可能性はある程度甘くみていた。失敗したら、第二、第三が続くということではあったけれども、ぼくはある程度懸念もっていた。

今西 これは実際登りにいったものも余裕があったのだけれども、やはり隊全体の余裕綽々たる実力がしからしめているので、聞いていても危げがない。(笑)

梅棹 やはりタクティックスの成功でしょうな。

中尾 とにかくポーラ・メソッド屋では、これはやらぬでしょうね。

山口 そういうことではなくて、ぼくは登頂隊員の性格とかこれまでの山への行き方といいますが、そういうものが途中で早くビバークしたことと関係があると考えたのです。たとえば、登頂隊員が平井、藤平、林さんというのだったら、おそらく夕方でも頂上へ行っているだろう

とぼくは思う。(笑)

林 それともう一つつけ加えなければいかぬのはこの山はひじょうに雪が深かった。しかし稜線へ出たら、いちおう雪もしまって歩きやすくなるだろうという期待は、隊の中に強くあったのです。なんぼおれや藤平や平井でも、あれだけ雪があったら、やっぱりビバークしておりました。(笑)

今西 サルトロを問題にするかぎり、日の暮れまで登ってビバークするという方法と、余力を残して早い目にビバークし、あくる日登るといふのと、どっちが賢明かという判断だったら、ぼくはやはり斉藤のとった方法がよいと思えます。

山口 それはそうです。

中尾 もう少しビバークの物質的な仕度をしておった方が、よかったのじゃないかと思うのです。

岩坪 食糧係の大將が行くから、どんな素晴らしいものを持っていかかと思っていたら、バニールが持っていったミルクをわかしまして、隠匿物資みたいなものばかり食うてはったそうで……(笑)

林 C4で頂上攻撃のタクティックスを話し合ったとき、装備その他いっさい最少限にすると決めたのです。今までの調子でC3、C4と来てこれをやらなかったら、C5から上のトレースに相当難渋するだろう。荷物を減らすことが最大の問題だったのです。

今西 欲を言うたら、あれもこれも持って行きたいということになるが、ミニマムで行かんならんから、その限りにおいて不自由することもあるだろう。その限界は決めにくいな。

加藤 それはやはりチョゴリザとかノジャックの経験で、これはいけるという気持がみなにあった。

ヒマラヤ登山技 術の再検討を

今西 これからのことも考えて、さらに軽量の装備をもっと発達させることが必要だね。加藤 それより登山技術をもういっぺん考えなおす必要があるのじゃないかな。テンポをもっと早くすることと、アンザイレンのこと。ブロード・ピークだって、みんな勝手にちゃらちゃら行って帰ってくる。そういうのが普通になってイタリ隊でもほとんどアンザイレンしてない。そのためにドイツ隊のように死ぬこともあるだろうけれども。彼らの装備にしても、軽いというより、いらぬものは気前よく棄てて置

いて行く。われわれはまだ、たいへん重装備だ
と思う。

林 ハント時代から比べたら、時代も進んでお
りますし、われわれの装備は問題なく軽量化し
ている。

中尾 ハント隊が今の装備だったら、登ってしま
ったのじゃないだろうか。

加藤 それはもう、ケンケンで登っておるだろ
うな。(笑) 彼らはヒマラヤによく慣れていたと
いうこと。その前によく歩いておられますよ。そ
れにアルプスを持っているのといかないのとで、
違いはかなりあると思う。

梅棹 それがいまだに効いておられますか。

林 いま加藤さんが登山技術のことをおっしゃ
ったですけれども、われわれの今の技術が悪い
ということでは決してないと思うのです。もっ
と進めば、もっと違った方式ができるという意
味じゃないかと思えます。

加藤 みんな技術は持っておる。ヒマラヤへ行く
とそれがあまり発揮されないのだな。

今西 もっと速く歩くということやな。

加藤 それは歩けません。(笑)

今西 それでは注文が無理だということになるじ
ゃないか。

平井 サルトロがコンプリート登山といわれるの
に、距離の測定の問題があると思えます。チョコ
ゴリザでは、ベース・キャンプから頂上までの
ルートが見通せない。テントの位置がわからな
かったのです。サルトロの場合奥行が全然ない
ので、全部わかるわけです。それからアイス・
フォールもなかったということ。

岩坪 ぼくらが第2キャンプから、第4キャンプ
以上の偵察を見ていると、いつも5人がぞろ
ぞろいっしょに行く。林さんか斉藤さんが孤軍
奮闘して、みなを待たして頑張っている。あれ
を2人と3人のパーティに分けて、偵察を交替
でやったら、スピードアップになったのじゃな
いですか。

林 実際の状況がわからなかったのでしょうか
どその時点については交替する余裕がないのと
スティープなところなんですわ。途中のラッセル
とか確保とか、相当エネルギーを消耗してい
るのだから、待っている時間が長かったという
のが、あれで過不足ない人数だったと思ってお
るのですがね。

岩坪 それから、バシールのお守りというのがあ
った。あれで最低2人はとられていたと思いま
す。

梅棹 あと時間の余裕がありませんが、ほ

かに重要な問題がありますか。

隊員の選考方法に疑問

北村 隊員の選考方法に
ついての意見がまだ出
ておりませんね。簡単
に申しますと、当時の木曜会において、一応A
ACKの全会員から公募するというようになって
おりました。ところが時間の関係その他もあ
って、委員会でその必要を認めずということに
なった。まあある程度の京都中央集権はやむを
えぬにしても、また京都で最後に決まるのは、
スムーズに行くことですが、やはりこれは
運営上まずいんじゃないか。事実、あとから
かなり苦情が出て、京都にいけない行けない
のかという意見も出てきました。

林 その回答は、アウトラインだけは総会で申
しあげたと思うのです。今後はそういうことの
ないように、木曜会の連中は外に呼びかけ、外
にいる人たちはまた京都の連中に呼びかけ、連
絡と接触をよくするようにしてもらいたい、ぼ
くはそう思っているのです。

公募の問題は会長からでも答弁してもらわ
なければならぬ問題ですけれども、今までの経験
から、公募してもそれを無視するような結果に
なってしまう。そういう公募は、単に形式だけ
のことに終わってしまい、かえって応募された方
に気の毒でないか、そういう会長の話があった
のです。今回の事情は、今まで3年も4年もサ
ルトロを待っておいて、頑張っていた連中が木
曜会に相当おるわけです。それだけでじゅうぶ
ん席を埋めてしまったというような感じで、今
さら公募しても埋める空白はなかったという事
情です。

今西 しかし原則として公募しなかったというの
は手落ちですな。

梅棹 これはAACKとして大問題ですよ。

中尾 木曜会というものがAACKの何であるか
ということ。

梅棹 それは大きな問題です。ほくもそれはいっ
たい何であるか知らぬ。

加藤 一味徒党や。(笑)

梅棹 みな木曜会に連絡をとるべきであるとい
うことになるわけだ。

林 とるべきじゃなくて、木曜会が今までサボ
っておいて、そういう役を果せなかったことを
ぼくはいいたい。

今西 そうなってくると、木曜会というものがま
すますわからなくなるけれども、AACKとし
て公募すべきであるというのが、ぼくの意見で
す。

林 会長あるいは今回の隊長が相談されて、そ
ういうふうになった。

梅棹 名乗りをあげさせなければいかぬ。それは
隊員を決めるときの最大原則だと思うな。

今西 だから、会長や隊長がそういう方法をと
うとしても、それではいけないという忠言をす
る人間が必要だな。

加藤 AACKは、こわい、えらいおっさんがい
て、若い連中はみなおとなしいですよ。

中尾 AACKには古だぬきがたくさんおるから
若手がそんなことに関与しても無駄だからやら
ないのだという、そんな空気があるのですか。
(笑)

林 そんなことは聞きはじめですな。

北村 私がおたずねしたのは、理事の方がみんな
公募の必要を認めないという意見だと思ってい
たからです。

多田 隊員の選考というのは、なかなか始まら
なんだのだ。とにかく12月、1月ごろになって、
いよいよ行かなくちゃならぬような時期になっ
てから、そういう問題が出たと思うね。だから
そのときには、公募してやるのは、たしか遅か
ったという気持ちもったと思うのです。

林 しかし、ここに桑原先生や四手井先生がお
られたら、「どうもすみませんでした」とあや
まられるところだと思う。もうその辺で。……

今西 しかし、今後こんなことをしていたら、い
けませんぞ。

加藤 その前に、もっとニスイことがたくさんあ
るのや、この会は。(笑)

今西 それで頭にきていたのか。それではしよ
うがないな。

多田 そのじぶんに、まだ隊長問題がうるさかっ
たのだからね。

梅棹 まあいろいろ事情があるにせよ、しかし公
募が第一原則であるということは、確認せん
らん。

第二登頂を 考えるか

加藤 それはそうだ。
梅棹 タクティックスの
ことでまだありますか
高野 第一次の登頂が成功したとき、二次、三次
を出す考えがあったかどうか、聞きたいので
す。

加藤 私はなかったです。こんな山に大げいかけ
登って、そんな危険をおかす必要はない。また
隊員の利害関係やメンツの問題から第二登頂を
する例が多いが、われわれの隊には必要ない
と思った。

林 ぼくはそれには反対で、全員登頂というこ

とを言ったのです。隊の態勢としても実にコン
プリートで、余力はあったのです。天気も続き
ましたし。

高野 余力はあったけれども、登らなかったとい
うのは……。

今西 それはフォーミュラとして決めるべき問題
ではないね。ケース・バイ・ケースで、その時
の隊長や隊員の考えもあるだろうし、AACK
は第一登だけで引きあげねばならぬということ
には絶対ならぬ。

加藤 それはならぬ。

林 もうそろそろ全員登頂という問題を考
えていい時期じゃないかと思えます。

加藤 山によりますな。

今西 全員登頂か、第一登頂だけか、と決める必
要はないと思う。その時その時によることで、
わしだったら、第二登頂でも登りたいし、登れ
たら登るかもしれない。(笑)

加藤 こわいおっさんやな。(笑)

林 余裕があったら、登ったらいいと思う。ヒ
マラヤもだんだん変わってきておいて、もう少し
個人的なプレイを楽しむ時期にだんだん変わ
ってきておると思う。マカルウも全員登頂してい
てきたらという希望も持っておった。しかし
山そのものもかなりソヴィエトだし、第一登頂で
みな気分をよくして、これで帰れぬこともない
だろうという、ぼくおよび加藤さんの判断だ
ったというわけです。

谷 ぼくはそれに天秤をかけておったのです。
第二登頂もしたいけれども、それよりもほかに
テラム・カンリなどの可能性があると思ってい
た。食糧も残しておかばならぬと思い、第二
登の意欲を押さえておりにきたら、シャット・
アウトをくった。

加藤 どこが悪いといっても、雪崩のこわいとこ
ろですから、長いあいだそこに人をおいておく
のは、どうしてもいやだと思った。

中尾 いくつもいくつも行ったら、そのうち何か
にひっかかってしまう危険がある。

今西 だから、ぼくが第二登頂でもやるかもしれ
ないと言ったのは、山によりけりです。

登山史上の 位置づけ

梅棹 それでは次の話題
に移ります。今までの
エクベディションは、
毎度毎度この次はどうする、この次はこの次は
ということをやってきたと思えますけれど、こ
れからも又同じようにゆくのかということが問
題になるわけで、谷君、ひとつ問題の提起を願
います。

谷 戦後15年もちました。AACK又はその会員が戦前からずっと続けてきた遠征の中で、戦後の幾つかの遠征は一つのグループとしてまとめることができると思います。つまり簡単にいえば、ジャイアンツの登攀ということにまとめられます。ではそういう動きはAACK全体の歴史の中でどういう風に位置づけられるか。更に登山の文化史といった方面から考えてそれは登山史の上でどういう意味があったか。これを諸外国の動きと比較しながら論じて、今後ジャイアンツがだんだん登られて、少なくとも7500m以上の山がなくなるであろう近い将来、これからどういうエクスペディション、登山が世界で行なわれてくるか、そういう見通しをまず出してもらいたい。その次に、そういう流れの中でAACKはどのような行き方をしたらよいか、この問題を採り上げていただきたい。こまかくいうと、どういう地域にこれから行ったらよいか、行こうとするのか。あるいは、どうやってパーティが組み得るか。これまではいつも大パーティで、メンバーも団子の串さしというようなこともいわれたけれど、いろいろな意味での経験の受け渡しということは、この大規模性と計画において可能であった。今後もし小パーティになった場合には、その経験の受け渡しが非常に難しくなるかも知れない。そういうパーティのあり方の違いによってAACK内にいろいろな問題が起こってくる。またパーティの組み方によって今後どうやって資金を集めるかといった問題、そういう点をも含めて議論をしていったらと思います。

梅棹 深刻な問題をだいたい含んでいるようですが、何からやりましょうか。今の問題を全部議論するわけにはゆかないので、ここでは問題を次の三つに限定しましょう。つまりAACKは今後どこへ行くのか。どうやってパーティを組み得るか。資金は如何に獲得するか。

まず登山もAACKが今までやって来たような初登攀主義でゆく限り、やはり探検と非常に似た運命にあって、いわば自らの首をしめるという結果が起きる。今それが起きつつある。行くところがだんだんなくなってきたということです。そこでAACKが今までやって来た一連の行為は、サルトロで一応ケリになるのかどうか。このへんからどうですか。

カラコラムはどうか

今西 問題を限定して先ずカラコラムから議論していったらどうか。

AACK とカラコラムの因縁は、1937年のK2討

画の頃から結びついているわけですね。それから1955年にはじめてカラコラム。これはAACKではないけれども、京大として入った。しかし結局55年にはカラコラム全域がとも歩ききれなくて、東の方と西の方が残ったけれど、それはその後梅棹が言った初登攀主義と探検があるところでオーバーラップして、西はヒンズークンからノジャックまで足がのびたし、東の方はシャチェンの方面が残っておったのが、今回で一応地図に赤線が入った。我々はビゴからカラコラム・パスまでをカラコラムと考えますけれども、シムシャル方面は現在の政治情勢では入れないのだからしかたがないとすると、そういう意味ではわれわれのカラコラム荒ごなしはできたわけですね。あと問題をしばってカラコラムに限って考えた場合、やるべきどういう仕事があるかというふうにせばめていった方が、わかりやすいのと違うかな。

梅棹 そうですね。何か次の仕事のイメージがあると思うが。

今西 サルトロには四年間もサルトロ、サルトロといった執念があったわけだけれども、それはこれで解消したから、今何も執念がないといえればそれも正直な話。こんど行ってきて又執念をつけて来たというのなら、それも又一つここで発表してもらおうということだな。

梅棹 この前のノジャックのあとでは、非常に小さいヴィジョンではあるけれど、グルラ・マンダータというのが出てきたね。今度は何もヴィジョンは出ませんか。

林 あっちからみておいたら、アスバラサスとかリモのあたりとか、ギャチュンカンとか、よだれのたれそうな山がいっぱいありますけれども、今西先生も言われたように恐らく入れぬだろうと思いますし、将来そういうものが解決されたらあの辺をAACKで一べんやってもいいじゃないかと思えますね。

今西 サセルはカラコラムの続きですから当然一応問題になる山ですけれども、現在のところまぎれ実現せぬだろうね。あそこからチャンタンの方へ入って行くのはいいけれど。(笑)

梅棹 それはいいやろな。

中尾 一番問題になるのは、この次にやるとしたら、7,700mよりも高い山へ行くのか、低くてもいいのか、ということじゃないですか。

梅棹 そういうこととは違うな。何かやはり行動目標としてのヴィジョンを持てるかということだと思。

加藤 カラコラムには、喰らいついてカッカする

ような山はありませんわ。

梅棹 ありまへんか。それはあっさりしている。今西 加藤君はそう思うても、若い人はどう思うているかわからぬ。

林 K2はぼくらいちおう……。

加藤 あんな高いところかなわん。(笑)

岩坪 こんどAACKには7,000m以上の経験者がうんとふえたわけです。それがこれからすたつてゆくのはもったいないし、そういう経験者を主体に、ちょろちょろ小出しにしたら、パーティはわりあい簡単にできるように思います。

林 簡単にできるという話ではなくて、そういうことを実際にやるパッションがあるかどうかという問題だ。

梅棹 岩坪君の場合は、AACK全体の問題が一個人に集約的に現われたようなところがあると思われけれども、四回むこうへ行ってどう感じておるか。

岩坪 今ちょっとあきておりますけれども、また十年ほどたったら。(笑)

梅棹 カラコラムか。(笑)

岩坪 ……………。

高村 ぼくらはチョゴリザのときから脇坂氏からネパールは、ネパールはという話をよく聞きますし、又他からもカラコラムしか知らぬのはかわいそうだという話もよく聞きます。そこで必ずしもネパールと限らなくても、ちょっと毛色の変った地域を歩いてみたいという気は大いにあります。しかしパキスタンに行く気がライラする反面、心の安らぎを覚えるようなところもありますので、その意味では又一年経いたらカラコラムあたりへ誰かゴソゴソ行くのじゃないか。ぼくでもまだ行きたいと思えますけれど。

梅棹 オラガ山という気安さがあるな。

ヤルカンドの彼方は？

加藤 どこへ行ってもあの山は知っているというわけ。隣りの横丁を歩いているようなものだ。ぼくは二回も行かしてもらったから、いい気になってそういうことを言うけれども、まだ6,000m 5,000mの山ならたくさんあるし、その経験をふまえてこれをグレンデとして、小さいパーティがどンドン出てゆくことはよいと思うけれども、おじいちゃんがカッカするような山はもうありません。わしはそう思っておるのだ。しかし、ひとつカラコラムで一番ねらいたいのは北の方だよ。ヤルカンド・リヴァーの方へは行きたいわ。(笑) そうするとパキスタンという

ような連中を相手にしてもらいがあかぬから、西の方のこわいおっさんの方から入る。そういうふうにやったらどうか。ロシアとか中国とかへもっと力を入れてもらいたいと思うな。共産党になるのは嫌いだが。

梅棹 社長だからな。(笑)

林 英国なんかスターリン峰へ行っておりますけれど、ああいう格好で将来日本もやれるのではないかと思うのですけれど。

加藤 やれるだろう。大阪外国語大学だって、蒙古へ出す。これはつぶれたけれど、よそのところにあっさりやられたら、腹が立ちますわ。

梅棹 要するにカラコラムは谷川岳のようになってしまつて、みんなよくわかつてしまった。小さい山は別としてもう今までのようにカッカとするほどのものは、少くとも現在はない。こういうわけですか？

一同 ウン。ウン。

梅棹 では、この問題はもうこれでいいやろ。

加藤 という気がするな。

巨峯第二 登主義

平井 初登攀主義では早晚行き詰まると思うのですが、いやもう今既に行き詰まっているのですが。そこで、これはやはり日本人の誰かがやらなければならぬと思いますが、エヴェレストとしては第何登かになります。日本人としては初めてというのはどうですか。これからそういう行き方もあると思います。

梅棹 ぼくはしかし現実の問題として、それは非常に難かしかろうと思う。日本の場合やはり初登攀という行き方が社会的に一つの型になっている。ということは、初登攀主義であればこそ金を集めることができる。エヴェレストということであれば、又扱いようがあるかも知れないけれども、その他のところなら何かよほどの特別の理由を発見しないと、社会的な通念を打ち破ることが難かしく、無理じゃないんじゃないかな。もし一歩ゆづつて、そういうやり方であっても、その成功率は大体エヴェレストないしはせいぜいK2くらいでおしまいで、そのあとは遠征隊の成立そのものがむづかしいことになりはせぬかと思う。

さらにエヴェレストにしても、第三登ならいざしらず、たとえ日本人としては初めてでも、第四登・第五登となつたら、これはえらいことですよ。自分の金で行くならよいか。

加藤 エヴェレストに入ったら、キャンプの場所が決まっています、便所はこちら、炊事場はあちらなどと富士登山をするようなものだけ。ちょ

っと高いけれど。

林 今エヴェレストの話が出ましたけれど、まだネパールではギャチェンカン、カンパチェンが残っています。こうした目標も一部AACKに残しておいて、機会があればそういうものもやってもぼくは不思議じゃないと思う。

AACKは二流たり得ない

今西 それを言い出したら、南米に何か小さい未登峯が残っていて、AACKが南米に行っても構わないということになりますけれど、なるだけなら、そんなまねはしたくないな。

梅棹 何かAACKの名門意識というようなものが非常にはっきりとある。それを崩したくないという、これも又ぼくはもっともなことだと思う。つまりよそとは違うので、なにもAACKがそういう小さい山に総力をあげてやらねばならぬこととはあるまい、それは又よそのどこかの大学がやったらよい、こっちは行き方が違うという。やはり伝統の問題があってそれを無視することはできない。方向転換するといっても、AACKが二流山岳会になることはできないのでね。ここがやはりつらいところだな。

林 つらいところでしようけれども、そういうことを言い出すと、チョゴリザでもサルトロでも似かよった山へ二回も行ったわけですから。

今西 そうだけれども、別に遠くにある中古車は気にしなくてもよいけれど、隣りに中古車の割合まじなのがあれは、ちょっと気になるというわけで、この点名門といってもまだ国内的な名門ということですか。

林 しつこいようだけれど、ぼくがさっき言ったような意味で、エヴェレストとかK2とかナンガとか、人は行っているけれども、日本人として新しい山というのは、まだある程度あると思えますね。そういうところに目をつけてもいい。

中尾 だけど、さすがはAACKだ、目のつけどころが違ふといわれるようなものをやって欲しいわ。

加藤 チョゴリザにしるサルトロにしる、完全無欠の処女と違いますよ。だいぶんきずがついている。(笑)

中尾 その点ノジャックはよかったね。ピーク29とか、いくつかあり得るよ。

今西 ちょっと落として選んでいったら、ぜんぜんむしがついてない小娘がいっぱいいるよ。(笑)

梅棹 それをさがすか。

加藤 当分はそういう小娘主義だな。

梅棹 この辺のところは、ちょっと印刷にできないな。(笑)

中尾 しかし初登攀主義をつらぬくというのは、エヴェレストなんか見向きもしないという訳ですか。

今西 それは、どこかの山岳会がエヴェレストをやると言い出したら、それではおやりなさい、俺達はやらない、とこう出なければしょうがないじゃないか。

梅棹 それは非常にはっきりした一つの行き方だな。

中尾 だんだん大物がなくなって、低くなっても仕方がない、処女峯をねらうかぎりは。

今西 それでいいのだと思うけどな。

梅棹 それはしようがない。どうでしょう。この問題は、これだという坦々たる道が前に開けたというわけではないけれど、このくらいにしておいては。

加藤 この問題は、まだもう少し考えてからやっていたらいいので、結論はなかなか出ませんわ。

アラスカ・アンデス 中尾 ぼくはいっぺん聞こうと思っていたのだけれど、アンデスとか

アラスカという話はないですか。

谷 アンデスはなかった。アラスカというのがありました。

今西 アラスカはずっと前だけれど、伊藤洋平が言っておったことがある。十年も前のことだから、ヒマラヤにウジャウジャ山が残っていると、阿呆なことを言うなといっておいたけれども、今は情勢が少し変わって来ている。

中尾 アンデスも山はなかなか高いし、きれいだし……

今西 しかしアラスカとかアンデスといったら、早稲田とか一橋とか……

梅棹 関西学院とか……。しかしこれも個人では大いに行くべしだが、前にも触れたが、AACKが総力を上げるというものではないな。

南極 谷 そういう点で南極はどうですか。

北村 南極の話が出ましたけれど、南極が他の地域と多少違う点は、遠征の目標が何かということです。地域探検の型の歴史的経過をみますと、だいたい四つの過程に分解できる。第一期は地理的探検。これは何があっても行けばよろしい。あるかないかがはっきりすればよろしい。第二期は第一期の探検を少し高度にして、又人文科学的な調査をも加え、いわゆる学術探検として成立する。第三期はこ

の学術探検の上に近代スポーツ・アルピニズムが加味され、両者の混然たる融合によって隊が成立する。AACKは最初のAがこれを示すように、まさにこの期の代表的なものであるわけです。第四期に入ると、これはもう学術探検そのものが成立しなくなって、つまりスイスのようにスポーツ・アルピニズムだけが生き残って横行する。もちろんこの四期はたがいに独立的なものではなく、随時、程度の差こそあれたがいに結びつくものです。

ところでこれがもし南極にあてはまるものとする、南極は今正に第一期又は第二期にあるわけです。それがIGY(国際地球観測年)で更に地理的探検にしても学術探検にしてもその程度が引き上げられ、もうソブトンやワークマンの若い時代のようにはゆかなくなって来ました。地理的にみても、グラムランド(南米の南)は山が多いけれどネパールのようにアチオチに人糞がころがっているというし、ロス海沿岸はいうに及ばず、ウイルス・ランド(日本・中国の南)はフランス・アメリカ・ソ連がウジャウジャ行きよったし、インドの南はオーストラリアが永久基地を持っているし、結局大西洋の南、昭和基地付近、それにちょっと東のエンダービーの奥地、これがまあ食指の動きそうなところですよ。しかしこれらの地域にしても、南極はすでに犬ゾリの時代は過ぎて今や重量戦車機械化部隊の時代ですから、スケールはうんと大きくなって来る。今いった昭和基地の奥、エンダービーの奥はヒマラヤでいえばエヴェレストでは勿論ないにしてもマナスル級です。これをやれば、世界の南極の地図に赤線が一本入ります。その奥地に、山岳地帯でも発見されれば更に大きな地形学的な業績があげられたことになります。

梅棹 それをやろうじゃないか。

北村 いやそれは、ただ行って来た、発見した、だけでは許されぬ時代に来ているのです。話をそこまでもってゆかなくても、もし山も何もなければどうなりますか。むしろ、「昭和基地から極までの間は山も何もない高原だ」でも一つの業績にはなりますが、京都大学、いやAACKがこれではあまりにもさみしいと思います。やはり大陸の種々の科学調査、つまり探検という肉づけがあってこそ、はじめて遠征が成立つのだと思います。

つまりこの事を、先の「時代」的な方面からいいますと、南極にアルピニズムが浸透するにはもう少しの時間が必要だということになりま

す。この第二期の学術探検時代にある南極に、犬樞・歩兵・重戦車、更に航空機の援護をつけて駒を進めることは、ヒマラヤにくらべてスケールの大ききで問題になりません。それを京都大学が先に開拓してゆくことは、言うだけなら別にして、これは大問題です。

今西 まず山は成立たぬというわけだな。

梅棹 ぼくは南極のことはよく知らないけれどもかえってそれが成立つようになってきたのじゃないかという印象もあるのだな。ここで思いきって学術はやらぬのだ。わしらは南極の山へ登りにゆくのだということをやったら、可能性が出てくると思うのだ。

今西 南極を学術が占領している間、わしらは追いつかれているというのは、非常に腹が立つね(笑)

梅棹 そうなるとちょっと面白い。ぼくら今までAACK内で学術派といわれていたかどうか知らんが、こうなると学術でなくて山でいこう。南極は処女峯がずらりと並んでおりますわ。なぜぼくがそう思うかという、これは逆説的な見方になるけれど、今の地球観測年がなかったらこの「山でゆこう」は成り立たない。地球観測年で学術はちょっと満ちたりたところがある。数年間やって基礎ができた。

そうすると新しいページがめくれるかも知れない。

北村 なるほど。これはうまいことをいわれましたね。つまり先程の言葉でいうと、南極も今や第二期から、第三期の学術とアルピニズムの混合時代、更には第四期の純然たるスポーツ・アルピニズムの時代へ脱皮してもいいんじゃないか。いやAACKが南極にこのアルピニズムの杭を一本ガーンと打ち込んでよいんじゃないか。また犬樞の時代に戻ったってよいんじゃないか。俺達は観測なんかしない。こういうわけですか。

今西 山はまだ足で登っているのだから。(笑)

梅棹 山はないか。

北村 山はあります。

梅棹 山へ行こうというわけだ。

中尾 学術会議が、山登り隊を出せまいけれどもAACKが船にちょっと乗せてくれと申し込んであとはよろしくやるという手もあるわけだ。

南極の最高峰?

今西 南極には6,000mくらい

の山があるというのは本当か。

北村 6,100m というのがあります。但し地図上

ではこの標高には？がつけてあって、はたして6,000mをこえるかどうか公式の保証はありません。

今西 処女峰か。

北村 その点はよく知りません。しかし5,000mをこえるのは、少なくとも四峰以上あって、これは登攀されたということは聞いていません。しかしその辺の上空は、マクマードから極点基地へゆく飛行機がブンブン飛んでいますよ。

今西 それは仕方がない。

北村 それにそこへゆく途中には、人糞がゴロゴロしているほど多いということです。

今西 それで登っていないのか。

北村 登る興味が無いのです。学者だから。そこがつけ目だけだ。

梅棹 そうだ。そこがつけ目で、いま南極に行っている者は皆軍人か学者だから山には興味が無い。それでこれはかなり開拓的な仕事ができると思う。はじめて山に興味のある者が乗りこんできたということで、これはちょっといいぜ。

今西 南極で5,000mというたら、ちょっと面白いな。

加藤 南極の5,000mというのは、空気が濃いだろう。

中尾 空気が濃いということが問題だ。(この意味不明、K氏は経済、N氏は農学部卒であることに関係があるかも知れない。編集者註)

北村 先程の6,100m峰(無名)はマリーバードランドの真中にあります。その付近(といっても500~600km離れたところ)にアメリカのバード基地があるので、これは可能性があるかも知れません。

梅棹 そうだ。外国、今の場合ならアメリカの登山家と語ろうて、外国の基地へ登山家として入ってゆく。学術に関係ないということでやるわけだ。

北村 そうですね。これは非常に可能性がある。アメリカは南極へ行く人がなくて困っているという話も聞いていますが(但しこれは科学者の話)登山家として行けるかどうかには疑問があるので、とにかく三人程科学者のふりをしてもぐりこむ。科学者といっても一年中科学の鬼になっている必要はないので、夏にはちょっと夏休みをもらって、その6,100mの無名峰に登りにゆく。あわよくば、あちらさんの犬糧とか重戦車を拝借してゆけば、これは非常に安上りでゆけそうです。ポケットマネーでゆけるかも知れない。(笑)しかしこれはAACKの誰かがやらねばならぬにしても、AACKの仕事では

ないですね。

梅棹 ぼくはそうは必ずしも思わんがわ。

北村 しかしむこうでは、高度を問題とするよりは、もちろん高度もあった方がよいが、むしろ水平的な未踏地域のほうが魅力があります。高さが5,000mというより、500km奥というほうが少なくともぼくには興味がありますけれど、そうなると又先程の航空機、重戦車部隊ということになる。

梅棹 重戦車一台チャータしてもいいけれどね。

今西 しかしその山をちょっと研究してみてくださいよ。山があったらわれわれは登りたくなるからな。北村が行った所にそんな山がなかったといっても、山があれば、やはり登りたくなるよ。(笑)

梅棹 これはアジるようだけれど、ひとつ南極山岳研究会というようなものをつくって、南極の山の研究会くらいやったらどうか。これはカラコラムがしまいにいったら、ひとつ考えてよいのと違うかな。

加藤 南極では、氷とペンギンしかない。東京タワーにのぼるようなものじゃないかな。やはり人間がいてくれないと、おもしろくないな。南極はあまり好かぬ。(笑)

梅棹 それでは話題を変えて、最後に残った共産圏の山々について語ってもらいましょうか。

山口 現在の国際情勢から、中共ソ連を考えると、今のところだったらゴサインタンやナムチャ・パールワ、それに近いだけ直打は落ちると思いますがグルラ・マンダータ。先程加藤さんが言われたヤルカンド・ダリアの探検を別にすれば、そうしたところしかないと思います。そういうところをねらうのだったら、現在国際情勢から非常に無理であっても、やはり今からねらってとりかかっていると、どこかよそに先を越されることになると思うのですが。

ネファ、ペコマイはどうか 中尾 中共の山もあるけれど、まだヒマラヤのネファ(NEFA)地域のような……

今西 しかしそうなると、やはりナムチャ・パールワになってくる。

中尾 ナムチャ・パールワのもうちょっと下に、インド領との境に、7,500mのペコマイという山がある。

今西 そんなものがあるのか。えらいことになってきよる。

梅棹 それはちょっとしたものだ……

中尾 それを山の人がどうして目をつけないのかと思う。ところがネファの壁をどうして打ち破るかということになるのだけれど、ネファの壁が打ち破れなくて、どうして中共へゆけるか。

梅棹 そういった地域は未来の夢としてみなあると思う。何かチャンスがあればつかむだけの姿勢はできている。しかしその姿勢だけではAACKのような団体はもたへんのですわ。サルトロのようなものがあって、それをやりながら、どこか一方に遠い夢があってそれをつかむ。これはできる。しかし、可能性がひよっとしたらできるかもしれんという程度のものにすべてをかけるわけにはゆかない。現実性がある、それに努力することによって一歩でもそこへ近づいていくということならよいけれども、そういう夢だけではちょっと……

今西 それを何かしないと、じっとしては道は開けない。たとえば河口慧海は変装してチベットへ入っていった。三人ぐらいが変装してナムチャ・パールワの下あたりまで偵察に入る。これは探検でなくて冒険かも知れないけれどもやってやれないことはない。(笑)

林 つかまってしまう。

今西 化けこみは、つかまえられたらしまいということではない。又逃げたらいのだから……。(笑)

加藤 殺さないね。北京までつれて帰ってもらったら、えらいトクやぜ。(笑)

梅棹 いっしょうやるか。

中尾 しかし潜入は、こういう団体の企画では、ちょっとぐあいが悪いですな。

今西 昔の軍事探偵でも、つかまえられても、陸軍から派遣されたということは、決して言わないぞ。(笑)

加藤 そのおかしさは。おもしろいじゃないか。

梅棹 そういうことをやってやるという者が出て来たら、運命が開けると思う。しかしこれは、どちらかというとき非常手段的なものだが、もっと他に方法はないものだろうか。

加藤 コーカサスだって行けるのと違うか。あそこの観光ルートにのってロシア人と仲よくなっていいたら、共産圏は案外早く開けるかも知れないぜ。

岩坪 コーカサスでしたら、ぼくらノジャックで会ったポーランドの連中は、全部スイス、フランスとかイギリスなどから装備を買っている。

それをわれわれが持って行ってやると言ったら簡単にゆくかも知れない。

桑原 それはいい手だ。せっかくノジャックでポーランドと関係がついたのだから。ポーランドを使うというのは、これは盟邦だから割合よいアイデアだ。

梅棹 ポーランドの連中と、そういう目的をもたない文通をしょっちゅう続けてやっているか、切れているのか。

今西 まあ切れているだろう。

岩坪 こっちはよく出していますけど……。

梅棹 むこうから来ないのか……。

中尾 ポーランドとジョイントしてソ連に入るといったら、学内でもよろこぶ人は沢山あると思う。

梅棹 ソ連は可能性がある。中国は非常にむづかしいけれど。

桑原 中国は今高崎さんが行って大へん曙光が出て来ている。あれが進展すれば、可能性がないでもない。文化交流を大いにやりたいということ、はっきり言うておる。

梅棹 しかし山というものは、日本では何というか、メジャー・スポーツでしょう。しかしむこうでは、マイナーもマイナーほとんどるに足らぬようなものです。

林 中共・ソ連を真剣に考えて、ロシア語なんかを積極的に勉強するとか、そういうことはどうですか。

桑原 ロシア語とか中国語。とくにロシア語はここでやっておいて絶対損はないな。

梅棹 しかし現実的に考えて、たとえばロシア人といっしょにやるというときに、今度の隊員の英語の実力くらいまでロシア語が到達するとはぼくは信じないな。

桑原 そりゃそうだ。今かりにソ連とやるなら、英語に限りませう。むこうもマタいから、ちょうどマタマタ同士で。

梅棹 さて今までだいぶいろいろな地域が出てきました。カラコラム、アンデス、アラスカ、南極、そして共産圏の山々。あとニューギニアを残して世界の秘境が大体出尽くしたわけです。

地域に関する議論はこれぐらいにして、次はパーティ論というか、どういう方法の遠征が考えられかという問題に移りましょう。

高村 今まで新しい地域についての議論がずいぶんありましたが、そういうふうにして新しい地域を求めていくやり方と、もう一つは山との取組み方を変えていくという問題もあると思います。

たとえば宿舎組織です。現にピアフォ氷河でやっているように、どこかの拠点にベースを構まえ、そこには氷河学者もいるし物理学者も越冬する。もろもろの混成部隊から成り、入れ替り立ち替り出はいいし、いろいろな毛色の変ったものを送り込む。そして山登りのシーズンには山登りばかりやる。植物のコレクションをやる時には植物学者がせっせとコレクションしているし、春夏秋冬を通じて山をやるものもおれば気象学者もおるといような形で、生きのびるという手もあると思うのですが。

梅棹 タンガニーカの京大類人猿研究所みたいいつでもだれかがいる。

加藤 それは面白いと思うね。カラコラムも折角開拓したフィールドだから、何らかの意味でこれは糸を切りたくない。これは実にいいゲレンデですよ。われらは二回も行かせてもらって今ゲップが出ているけれど、未だ行ってない人もあるのだから、これから若い連中だけで、小さいパーティをどんどん出す。今までAACKの遠征というと、ちょっと小むつかしくなったけれど、これからはもっとスポーツ的なものをどんどん出してゆく。場合によたら高村の言うように向こうにベースを作って置いて、入れ替り立ち替りあそこもここも、全部登ってしまう。

梅棹 それはひじょうによいすな。それくらいの力はありますよ。

林 AACKのちょこちょこ行くのはなかなか隊が成立しない。こんどのインドラサンはまともになりましたけれども。そういう小さいものも気に入らぬと言わないで、ルート連中の頭をもっと変えて欲しい。カラコラムの山はネパールにくらべると、アプローチがみな短い。そういう点では実によいフィールドです。それにジャングルがあるとか、深い峡谷があるとかいうことも、ひじょうに少ないですから。

加藤 何といったって健康地ですよ。

中尾 健康地です。

加藤 ほんとうに若い連中だけで。上にヒヒオヤジをつけないで。

梅棹 それでは時間もなくなりましたので、これで座談会を終ることにしたいと思います。長時間にわたり、熱心な討論を続けていただきました。どうもありがとうございます。

× × × ×

1962年10月、帰国したサルトロ・カンリ遠征隊員を迎え、AACK会員、京大山岳部員の有志が集って、サルトロ・カンリ遠征をめぐる座談会をした。座談会の内容は、1.サルトロ・カンリ遠征を終って

2.合同遠征の是非、3.カラコラムの登山——比較地域論、4.AACKの将来、の4部に分かれ、速記録は200字詰め原稿用紙520枚の大部のものとなった。この記録は、はじめ公式報告書に収録する目的で作製されたものであるが、報告書が別の形で編集、刊行されたので、会長の許可を得て、ここにその一部を発表した。第一部の「遠征の回顧」、第四部の「将来の展望」の速記録に若干手を加え、内容を圧縮した。編集責任者は、北村泰一、酒井敏明である。

AACKの30年 — その2 —

平井一正

AACK結成まで

AACKの歴史を語るには、まず、その母体となった京大旅行部について語らなければならない。しかし残念ながら、大正時代の京大旅行部が、どのような性格であり、どのような活動をしていたかについては、くわしく調べる機会を持たなかった。ただ、当時の旅行部には四高系の人達を中心となり、遠足班というものもあって、性格はあいまいなものであったといわれている。

× × × ×

今西達の三高卒業までについては、時報第1号に北村が書いた。私は彼等が京大へ入学してからを書く。

今西等が京大に入ったときの旅行部も、部としてははっきりとした性格はなく、彼らの登山思想を満足させてくれるような雰囲気ではなかった。そこで、彼らは新しく旅行部山岳班を結成した。これがやがてAACKの母胎となるのである。

大正10年、榎有恒がアイガー東山稜を初登攀し、帰国して近代アルピニズムを伝えてから4年、ようやく日本の登山界が近代アルピニズムに脱皮しようとしていた時である。今西等は登山技術をヤングの「マウンテン・クラフト」で独学し、剣沢合宿でそれを実行に移した。今日源次郎尾根、チンネ、ハツ峰等々にわれわれはその記録をみる。彼らは山登りばかりに熱中したのではない。京大という大きい組織を利用して、三高山岳部ではできなかったことを、次々にやっていた。すなわち、山岳図書の蒐集、笹ヶ峯ヒュッテの建設、関西学生山岳連盟の結成等々である。

ヒマラヤの勉強、カナディアン・ロッキーの勉強をするには、どうしても、外国の山岳図書が必要であった。ちょうど西堀の兄が神戸で亜米三という貿易商

を経営しており、ある外国人が彼の山岳蔵書を売りに出していることを知らせてくれた。この外国人の名はドント(英国人)で、六甲のドント岩にその名残りをとどめているように、よく六甲登山をした人であった。約150冊から200冊近くあったその蔵書にはたいいのめぼしい本がそろっていた。費用は当時京大図書館々長の新村出さんの御好意で図書館の予算から出してもらった。これをライブラリーの種として、今西、桑原らは直接外国の古本屋からカタログをとりよせたり、丸善を通したりして着々と山岳図書を揃えていった。ヨーロッパの登山勃興期の古典をはじめ、アルパイン・ジャーナルの完全なセット、スイス山岳会発行のDie Alpenの完全なセットは、当時京大しか持っていないものであった。図書の中には図書館の費用で買ってもらったものもあったが、自費で買ったものも多い。昭和2年には1,000冊にもなっていたであろうか。ちょうどこの年、京大ヘラグビーの御親戦に御来学された秩父宮に、特に農学部の一室を借りて、この当時日本一といわれた蔵書を陳列してお目にかけてこともある。今西、西堀、桑原の三人がモーニング姿で御説明申上げると同時に、笹ヶ峯ヒュッテの建設計画をご説明しご賛同を得た。そのおことは大いに利用した。(戦後のルームの火事で、その貴重な蔵書を失ったことは全く惜しみても余りあるものがある。)

ついで翌昭和3年には大正14年以来入っていた笹ヶ峯にヒュッテが建設された。当時大学山岳部でクラブヒュッテを持っていたのは北大唯一つであった。大学へ働きかけ、費用の足らぬ分は一般の寄附を仰ぎ、こうして建てられた笹ヶ峯ヒュッテは、内地では勿論はじめてのクラブヒュッテであった。(いまわれわれは笹ヶ峯という場所をえらんだ先輩諸氏の眼のたかさに敬服している次第である。)

今西、高橋らの功績としても一つあげるべきものは昭和4年の関西学生山岳連盟の結成である。今西はすでに卒業して兵隊に行っていたので、高橋らが主に中心となって進めた。そして関西西岳連の機関紙を発行した。当時として横書きの機関紙も珍しかったが、その1号、2号の記録にはみるべきものが多かった。

× × × ×

昭和3年今西、西堀らが、つづいて高橋健治らが卒業、現役の中心が甲南高校から来た伊藤廉に移った。今西、西堀らから伝えられたバイオニア精神はようやく国内の山だけでは満足できぬようになり、眼は海外へ向けられるようになってきた。

まず、高橋、奥が昭和5年春ヨーロッパへ向かった。目的はヨーロッパの登山技術を仕入れ、氷河の経験をつみ、さらに登山装備を研究することにあつた。欧州アルプスの先駆者は松方三郎をはじめ先輩も多い。しかし、渡欧した三人の行き方はちがっていた。ガイド

なしで盛んにアルプスに登っていたスイスのチューリッヒ山岳会を手本にして、彼らもまたそれに同じた。

一方、内地で伊藤がカムチャッカ遠征を考えていたとき、1929年のドイツのバウアーを隊長とするカンチェンジュンガ遠征の報告書が届いた。登頂こそ成らなかったが、この隊の東北稜の登攀は多くの示唆すべき点をもっていた。ことにこの報告書の末尾の遠征費用の明細によるとバウアーは2万円カンチをやっていた。"2万円あったらヒマラヤに行ける"ということは大きな刺戟であった。今西、伊藤らにとって今まで"高嶺の花"としか思えなかったヒマラヤ遠征が、たちまち現実性を帯びて現れたおもいであった。

バウアーの報告書について徹底的に研究し、目標をカブルー(7,333m)においた。当時の旅行部々長郡場寛、名誉教授小川琢治がこの計画を支持してくれた。今西、西堀は小川琢治の紹介状を手に大阪の朝日新聞社の門を叩いた。編集局長上野精一はこの話に大いに乗り気になり、また資金の一部にインドとの取引の多かった岸本商店からの援助も得られた。さらに田中喜佐衛門は3,000円を当座の資金にと寄附してくれ、留守本部々長であった桑原がそれを住友銀行京都支店に預け入れた。隊長は郡場寛、時期は1932年と決定した。しかし、ヒマラヤに行くためにはもう一つ、主体をどこにおくかという問題があった。京大旅行部という現役団体では勿論ない。そこで今西、西堀、宮崎、伊藤らが考えてAACKを結成し、そこに主体をもたせた。これがAACKの創設の動機である。当初は会員数も二十数人だけで、今西、西堀、桑原、四手井らをはじめ、会員はその育成に努力した。昭和5年(1930年)も終りの頃であった。

AACKは創立の目的からしてもヒマラヤを前提としたものである。学校出て海外遠征の志を失わぬためにと作った精神は30年たった今でも受けつがれている。今日までAACK会員による外地遠征は戦前戦後を通じて30以上を数える。

しかし、このAACK結成の動機となったカブルー計画は翌年1931年の満州事変のため、ついに日の目をみるには至らなかった。ヨーロッパにいた高橋、奥らに云って、送ってもらったバウアーの装備一式も直接の役にはたたなかった。ただ、1931年の12月に出版されたバウアーの報告書の、伊藤による訳書、「ヒマラヤに挑戦して」がその名残りをとどめている。

AACK第2次ヒマラヤ計画まで

実現こそしなかったが、このカブルー計画は、それ以後の遠征登山のきっかけを作った。国内の山行はすべてヒマラヤ遠征を前提としたものとなり、朝鮮、満州の山々で、遠征の経験を積み重ねていった。

大体、AACKのその後の歩みの中心は、今西、西